

スペインで活躍する行橋市出身の画家九十九伸一さん(53)が、二〇〇四年から山元眞神父(五毛)の依頼で始めた行橋カトリック教会五十周年の創作活動を十一月に完成させた。ステンドグラス「天使の空」や百二十号の大作「聖霊降臨」、壁画「自然の恵み」など聖霊を表す独特のU字形フォルムが基調だ。「作品の展示場ではなく祈りの空間」と位置付ける九十九さんに創作の難しさを聞いた。

「五年がかりの創作ですが、きつかけは。」

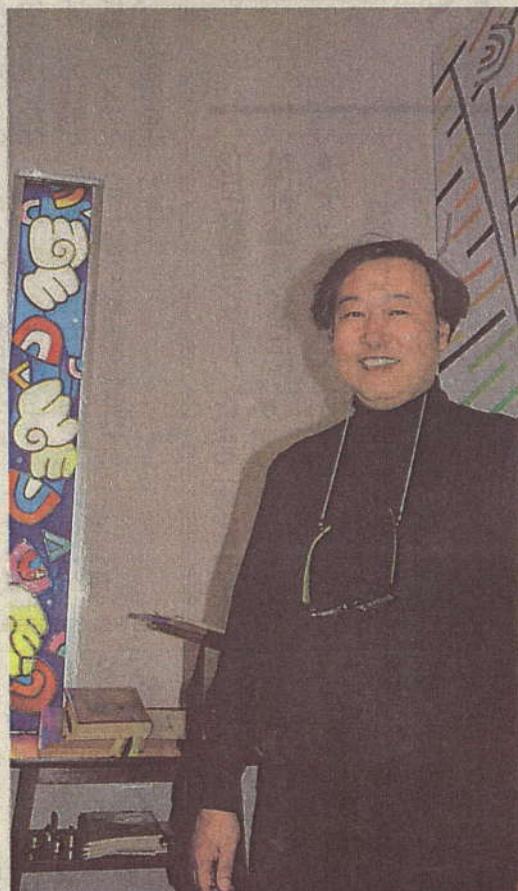
「山元神父と共通の友人がいて知り合いました。話しているうちに、考えを理解してもらえらると思えました。教会が私の生まれた年にできていたのも縁を感じました」

「聖霊を描くことにはかなり苦労されたそうですね。」

スペイン在住の画家

九十九 伸一さん(53)

物質でなく普遍性を描く



つくも・しんいち 1955年8月4日生まれ。行橋市出身。1980年九州産業大学大学院卒業後、イタリアで洋画勉強。86年スペインへ移り、スペイン国際現代美術展などに出品。バルセロナ市郊外サンクガット市に自宅とアトリエ。妻依世子さん(52)は日本人学校の音楽教諭。長男太一さん(20)はチェロを学ぶ。

「最初は自分の準備ができていないと気づき、次は見えないものは描けないと考えました。クリスマスチャン ज्याないの聖霊の意味が分からず夢でもうなされました。行き詰まったときに聖書の「炎のような舌」との一節に救われました。絶望してやめたと思ったときに聖霊の形と

「言われた気がしたんです」
「舌と聖霊がつながったのですか。」
「それまでの自分の絵で空間や音の動きをU字形で描いていました。聖書の一節を読むことで自分のオリジナルのフォルムの中に聖霊があったと気付かされました。教会の祭壇に飾って

ある聖霊降臨は何カ月も描けなかったのに、聖霊が描けたら一週間で完成しました」
「無償で描かれましたね。」
「有償だと期限内に仕上げようと思いましたが、無償では発想がわくまで描くことができな

いと感じました。最後はポラントイア意識も消え神という絶対的なものを通し、みんなで共有できるテーマに向かえました」
「創作を終えた教会をどう感じますか。」
「聖堂に入ったときに空間が

は物質ではなく、その奥にある普遍的なものだと思います」
(行橋支局・守守真樹)

ひと 地域